



図1；他のデータと併せて総合的に評価するとはいえ、このグラフは日本犬の順応力の高さを最もよく物語っている。[初級；n = 4、中級；n = 7、* p < 0.05 (マンホイットニーのU検定)]

になって」の部分に注目し、訓練中に見られる飼い主と犬の行動（相互関係）を解析項目として研究を進めることにした。

犬が飼い主を見る時間

行動解析を行う際の鉄則は「複数の行動解析経験者が、研究背景を知らされずに解析を行う」ことだ。事前に訓練風景の撮影と里守り犬会議への出席を経験している私と学生3名は行動解析に参加せず、その代わりに実習で行動解析を経験した複数の学生に行動解析をしてもらうことにした。撮影法などの詳細は割愛するが、注目した解析項目は「1. 飼い主が犬の方向を向いている」、「2. 犬が飼い主の方向を向いている」、「3. 飼い主が犬に報酬を与える」、「4. 犬が飼い主の正面に座る」、「5. 犬が地面の匂いを嗅ぐ」、「6. 犬がリードを引っ張る」の6項目で、訓練中（ON）と訓練以外の時間帯（OFF；順番待ちの時間など）について、1～6の行動の時間と回数をカウントした。

いつでも命令に従う準備

解析した6項目のうち、特に驚いたのは項目1と2だ。図1を見ていただきたい。飼い主が犬を、犬が飼い主を見る時間をONとOFFで比較したものだが、級が初級から中級へ進級すると、犬が飼い主を見る時間のみONとOFFで差がなくなってしまう。他の項目（割愛する）と併せつつ、このデータを解釈すると「全般的に視線を送る頻度は下がるものの、飼い主は級が上がってもONとOFFの区別をつけ、集中力に変化をもたせているが、犬は級が上がると、視線を送る頻度に差がなくなり、定常の状態あるいは緊張し過ぎない状態を（訓練中であろうがなかろうが）保ってられる状態になる」となるだろう。

決して犬が手を抜いているわけではない。もしそうであればインストラクターが気づき、その犬を進級さ



図2；中級の里守り犬候補生の訓練中の様子。この風景を見て、はたしてどれくらいの人々が「この犬は落ち着いている」と判断できるのだろうか？ 評価の決め手は日本犬特有の巻き尾、耳の向き、被毛の状態である。

せないだろう。また、図2を見ていただきたい。OFFの時間帯の犬と飼い主の写真だが、行動学的に見てこの犬は完全にリラックスしている状態ではない。少し擬人化しすぎかもしれないが、前後関係から見ても「落ち着いて飼い主の命令に従う準備ができている状態」と解釈される。

ここからは私の予想だが、日本犬の「リラックス」は洋犬のそれとは異なったディスプレイで示される可能性が高い。屋外で主人の家を守ってきた彼らにとって、洋犬の見せるような「完全に四肢を投げ出した状態」での休息はありえないだろうし、だからといって彼らが、いつまでも気が抜けないわけでもないはずだ。これがもし洋犬であれば（犬種にもよるだろうが）、飼い主に頻繁に視線を送りながら命令を待つだろう。実際にこの後、飼い主が合図を送ると、この日本犬は何事もなかったように立ち上がり、見事に訓練課題をこなしてみせた。

修行僧のような日本犬

前述の種々調査から、日本犬は（少々雑な表現だが）頭が悪いと解釈されがちだが、私はそうは思わない。すなわち、日本犬特有のディスプレイを人間が理解できていないだけであって、それを「飼い主に集中しない無愛想者＝頭が悪い」と解釈するのはあまりにも勝手過ぎる。彼らは私たち人間よりもよっぽど鋭敏な感覚をもって、ときに洋犬よりも落ち着いた状態から即座に行動を起こし、何よりも大切なご主人の命令に黙々と「従って」いるだけなのだろう。自分で考え、黙々と、迅速に行動する。そんな日本犬の行動を見て、まるで修行僧のようだと理解しえたとき、それは感動の瞬間でもある。

（この一文を、現在必死に難病と闘っておられる、敬愛する師匠に捧げる）